Japanese Forestry Society

森林教育の理念と研究の課題
—議論の素材として

比屋根　哲
（岩手大学農学部）

はじめに

21世紀は、森林問題についての人々の関心に応えるためにも、日本林学会がより幅広い視点から研究活動を展開していくことが求められている。その一つの課題に森林教育研究がある。本特集をはじめ、これまで様々な森林教育実践が著書や学会報告などの形で紹介されてきた。森林に関わる教育活動は今にはじまったことではないが、近年、地球環境問題に対する認識が広がり、森林も環境の観点から注目されはじめるようになって、森林教育も活発になってきた観がある。こうした動きに対応して、林学会でも森林教育を対象にした研究がみられるようになってきた。

森林教育を森林に関わる教育的活動ととらえるならば、それは学校教育から生涯教育、ひいてはNPOやボランティア団体等による活動によって結果的に生み出される教育的営みまで、非常に幅広い内容を含むことになる。幅広い内容を持つ森林教育研究には、研究者を虜にする様々な興味や問題意識があってよいだろう。しかし、一方では研究者をめぐる状況の厳しさから、ともすれば研究者のなかで興味や問題意識が成熟する前に研究成果のとりまとめを迫られる状況も生まれつつある。これは、まだ駆け出しの段階にある森林教育研究にとっては、思わぬ混乱や停滞を招きかねないゆゆしき問題である。

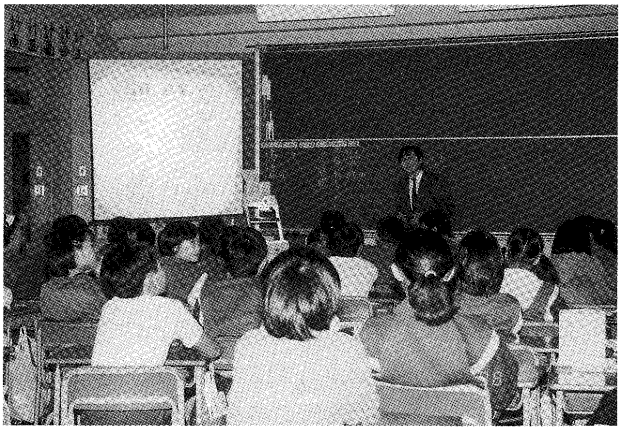
私自身の森林教育研究もまったくの手探りの状態に近いものであるが、以上のようなことを考えながら、この機会に私の森林教育に対する問題意識や理念、研究課題についての考えを、議論の素材として紹介させていただくのも意味のあることかと考えた次第である。

私の体験談から

森林教育研究については、そもそも林学会がなぜ教育のことまで踏み込んで取り組む必要があるのか、といった根本的な点で疑問を抱く読者もおられるだろう。ここでは私自身のいくつかの体験談から話をはじめてみたい。

小学校の教科書に「林業」が復活？

少し前の話になるが、小学校の学習指導要領の改正で社会科の教科書に林業の記述が復活したという話題が、林業関係者を喜ばせたことがある。しかし、果たして実態はどうだろうか。様々な産業の様子を学習するのは、小学5年の社会科である。教育出版の教科書（1998年版）を例にとると、社会科5年（上下）はあわせて4章構成になっており、それぞれ、1）食料生産をささえる人々、2）工業生産をささえる人々、3）くらしをささえる通信・運輸、4）見直そうわたしたちの国土、とな



小学5～6年生向けの授業（森林と林業の話）
児童の反応から森林教育の課題が見えてくる

NII-Electronic Library Service

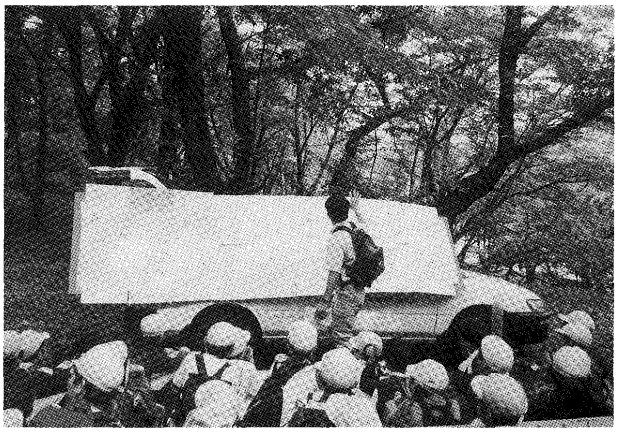
Japanese Forestry Society

っている。このうち、林業は4章で環境を守る仕事として森林を育てる作業等が紹介され、林業の文字もわずかに登場している。林業が国土や環境の章で取り上げられることに異議はないが、農業が独立した章を構成しているのと比べるとあまりにも記述の少ないことが気にかかる。さらに小学校の先生から、この森林や林業の部分は5年生の3学期末で時間が余りとれず、さらっと流してしまうことが多いと聞かされると、小学校での林業の扱われ方に疑問が生じてしまう。

私は、以前に岩手県内のある小学校の6年生全員（約130名）に、「森林」と「林業」の2つの言葉から思いつく別の言葉をそれぞれ10個まで記入させるアンケート調査を行ったことがある。その時の児童が回答した言葉の数は、「森林」では1人あたり平均で約7語だったのに対し、「林業」では3.4語と、森林から思いつく言葉の数の半分にも満たない結果であった。このアンケートでは言葉の回答数が多いほど、児童は提示された刺激語に対して豊かなイメージをもっていると解釈できるので、6年生児童の林業に対するイメージは5年生の時に林業について学んだはずにも関わらず、きわめて乏しいものと言わざるを得ない。教科書に林業の記述が復活したのは喜ばしいことだが、一歩、教育の実態に踏み込んでみると、喜んでばかりはいられないというのが実感である。

学校における森林教育実践の可能性

学校教育で、もっと森林や林業のことを取り上げてほしいと思っても、学校には教科教育を中心にした動かし難たい教育体系があるわけで、無い物ねだりはできない事情もあった。しかし、森林教育を実践するにはまたとない好条件が近々到来することになった。2002年度から学校教育に導入される「総合的な学習の時間」である。これは、各学校が地域や学校の実態に応じて創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開できる時間を確保する主旨のもと、児童・生徒が自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を身につけられるように導入されるもので、小中学校では年間100時間前後が割り当てられる。この時間は、上記の主旨やねらいを達成する内容であればそれぞれの学校が自由に課題を決めてよいことになっているが、国際理解、情報、環境、福祉・健康等のテーマが例示されている。



みんなで調べた樹木位置図からわかること
森の印象が鮮明な調査直後に現地解説を試みる

例示とはいえ、総合的な学習の時間のテーマとして「環境」があげられていることから、その環境学習の舞台として森林が大きく取り上げられる可能性が出てきたわけである。実際にも、すでにいくつかの学校では総合的な学習の時間の本格的導入に備えて森林体験学習が試行されている。森林教育にとっては、まさにチャンス到来というところであるが、どうやら黙っていても果報は転がり込んでこないようである。

日本環境教育学会では、総合的な学習の時間を環境教育実践の好機と位置づける一方で、比較的教育内容がイメージしやすい英会話教育（国際理解）やパソコン教育（情報）に侵食されるのではないかと危機感を強めている。たしかに学校現場からしてみれば、環境教育の重要性はわかっていても教育実践の蓄積がほとんどないため、膨大な時間を与えられてもどう時間を使っていいかわからないというのが正直なところかもしれない。だとすれば、地域性を問わない英会話教育やパソコン教育のようにマニュアル化はできなくても、教育現場において環境教育の具体的なイメージを早急につくりあげないと、せっかくの環境教育の好機が失われてしまいかねない。

環境教育の置かれた以上のような状況は、総合的な学習の時間で好機をつかもうとしている森林教育についても同様である。学校教育において森林教育を展開するチャンスを生かせるかどうかは、今後、一つでも多くの森林教育の実践を積み上げながら学校教育にふさわしい森林教育のイメージを確立できるか否かにかかっている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Forestry Society

ある小学校教師の環境教育プラン

教育現場には、総合的な学習の時間を利用して大いに環境教育に取り組みたい、そのフィールドとして是非とも地域の森林を活用したい、と考えて努力されている先生方も少なくない。そんな小学校のある先生から、森林問題からエネルギー問題へつなげる環境教育プランを考えたので聞いてほしいと言われたことがある。その先生から聞かされた授業展開の大まかな流れは次のとおりである。

＜導入＞

(1)木の役割について伝える（水を蓄えるダムである。酸素を供給する。土にかえり栄養になる。薪や炭のような燃料になる。…）

＜森林に関する話題の展開＞

(2)森林と環境（木をきりすぎて砂漠化しているところもある）

(3)森林資源の利用（日本ではどういう用途で木材を使っているか？）

(4)国際比較（先進国と開発途上国での木材の使い道の違いは？）

＊国際理解教育の観点を含める

(5)開発途上国の多くでは燃料として木を燃やしている
→　木を燃やさないで済む方法はないか？

＜エネルギー問題へ話題の転換＞

(6)木を燃やさないためには原子力の利用が必要じゃないか？…

環境教育の観点からは、原子力利用の扱いは大きく意見が分かれるところであるが、それはそれとして読者は以上の授業における森林の扱われ方にどのような感想を持たれるだろうか？この先生は森林を教材にすることに非常に熱心で、その後、林業白書等の文献も勉強され、結局、この環境教育プランは日の目をみずに終わった。おそらく全国には総合的な学習の時間を契機に森林を教材にして環境教育に取り組もうと考えておられる多くの現場の先生方がおられるだろう。ただ、この先生のように森林科学の関係者と会話の機会を持ち得る現場教師はごくわずかしか存在しない。

私自身は、およそ以上のような体験から、まず、学校教育の制度的枠組みの中には森林教育活動を飛躍的に展開する条件が拡大しつつあること。しかし、何も手を打たなければ、環境教育とともに森林教育を展開する場も失われかねないため、学校教育にふさわしい森林教育のあり方について具体的に早急に明らかにしていく必要があること。森林教育活動は現場の熱心な教師に支えられることになるが、教師がほぼ独力で森林教育を実践し得るまでは何らかの形で支援が必要なこと、等を感じとった。それでは、だれが学校現場を支援してくれるのだろうか。教育に関することだから大学の教育系学部や研究機関が努力してくれるだろうか。森林教育に関する私の問題意識は、こうした体験を通して徐々に鮮明になっていった。

これまでの森林教育研究を概観すると

森林教育に対する問題意識は特段に論理的である必要もなく、「何とかしなければ」という感覚だけで十分かもしれない。しかし、森林教育を研究課題にして、学問のサイドからどのような貢献ができるかを考えた場合、「思い」だけでは研究は遂行できない。やはり従来の研究の到達点を見極めながら、今後の研究のあり方を考える必要がある。

これまでの森林教育研究を概観するうえで参考になる文献に、関岡（1999）による、過去に「林業経済」誌に掲載された森林教育研究のレビューがある。関岡はこれまでの研究の特徴について、総じて大学の林学教育に関する論文が多いこと、最近は幅広い観点から森林教育がとらえられていること、内容的には、教育史や教育の現状等についての記録的価値の高いものが多いが、森林

間伐後に木の円盤を採って年輪数調査
事前に「根元と上部で年輪数は同じ？」等と動機づける

NII-Electronic Library Service

Japanese Forestry Society

教育の教育原論についての研究はこれからの課題であること、等を明らかにしている。

私も、およそ過去10年間に発表された林学会論文集を中心に研究発表の内容を調べてみたが、森林教育研究に関しては、森林教育の定義に関するもの、林業振興・地域振興の観点から検討されているもの、市民参加論の立場から検討されているもの、教育実践の実態調査報告等の、どちらかといえば社会科学的な切り口からの研究が大半であった。

これらの研究蓄積からは、森林教育研究にとって重要ないくつかの視点を見いだすことができる。私が重要だと思ったのは、およそ次の三点である。第一は、森林教育には環境教育の視点が必要だということである。第二は、森林教育研究の深化のためには、教育学、社会学、心理学等との共同による学際的取り組みが必要だということである。そして第三は、森林の位置づけ、森林・林業のとらえ方そのものの再検討の必要性が森林教育研究を通しても明らかになってきたことである。

一点目と二点目は、いずれも主として環境教育や野外教育の分野でも活躍している森林科学の研究者が、研究実践の中での実感を含めて指摘しているもので、とくに補足説明は必要ないであろう。三点目については、少し当事者の意見を引用しておこう。関岡（1993）は「『人間と森林との関連性についての教育』の実践段階における教育原理として環境教育の理念が適用されることが重要」であるとし、「そのためには、森林の位置づけそのものを見直すことが重要」と述べている。また山本（1992、1998）は「森林は木材生産とその他の公益的機能を発揮しうる公共財であり、それを管理し保全する手法の一つとして木材生産が必要なのであるという考え方への転換が必要」だとし、かつての「林業に誤った施策や施業があったこと」を認め、一般市民を対象とした林業教育は「こうした過去の過ちに対する反省に立ち、林業自体のあり方の変革をうちに含みつつ、適正な森林利用としての林業の重要性を広く普及することが目的」として行われるべきだとしている。

この三点目の話は、林業関係者にはいささか耳の痛い話かもしれない。しかし、私自身の経験に照らしても、これらの議論は正当だと思う。かつて自然保護運動の高揚期には、林業＝自然破壊という単純な見方が支配的と思われた時期があった。しかし、現在ではこうした見方が完全に克服されていないとはいえ、森林ボランティア活動が広がりを見せていることからもわかるように、多くの市民は日本林業の置かれてきた実態に気づき始めている。こうした変化をとらえずに、未だに自然保護運動の被害者としての意識で、人々に向けてひたすら林業を弁護するだけの普及啓蒙活動に終始するのでは、せっかくの林業応援団としての市民を遠ざけてしまうことになりかねない。多くの人々の理解を得るためには、これまでの林業の歩みと現状を正確にとらえる努力をし、その成果を率直に人々に語りかけることこそが大切だと思う。

環境教育論に学ぶ

さて、そうはいっても教育の現場で、教師が森林や林業について正確にとらえて人々に語りかけるということは、そんなに簡単にできることではない。第一には、そもそも森林と林業の歴史と現状を正確にとらえることが難しいという問題がある。しかし、難問はもう一つある。それは、森林や林業の歴史と現状を正確にとらえようとすれば、どうしても我が国の林業政策の評価や批判を含まざるを得ず、時の政策や社会に対する批判を含むかもしれない事柄を、教師がどれだけ自由に人々に語れるかという問題である。同じような困難をかかえているのは環境教育の分野である。つぎに環境教育をめぐる議論について触れておこう。

1977年に開催された環境教育に関する政府間会議（トビリシ会議）では、環境教育の基本目的を「個人や社会に自然の複雑な性質と、生態学的、物理的、社会的、経済的、文化的なものが相互に作用しあった結果生じた環境を、うまく理解させることであり、環境問題の予測と解決および環境の質の管理をする場合に、責任ある効果的方法で携われるよう、知識、評価、態度、実用的技術をえさせることである」とする文書がまとめられている。ここでは環境教育の指導原理についても、1）学習者に、環境問題の兆候や真の原因をみつけさせること、2）教育の過程と実生活のより緊密な結合をもたらすこと、3）それぞれの社会が直面している環境問題を中心に、環境教育活動を作り上げ、環境問題の正しい理解ができるような学際的包括的なアプローチを使って、それらの分析を行うこと、と明記されている（以上、藤岡ら（1998）訳）。今から20年以上も前に各国政府間で環境教育に関するこのような文書がまとめられているにも関

NII-Electronic Library Service

Japanese Forestry Society

わらず、「環境問題の真の原因をみつけさせること」という指導原理は、わが国の教育現場で貫徹することは現在でも難しいだろう。環境問題の真の原因がゴミのポイ捨てなどの個人のモラルに起因することであればよいが、これが企業のゴミの不法投棄であったりすると、教師が児童・生徒の前でこれらの企業を批判してみせることは簡単ではないと思うからである。かつて、70年代の公害教育が偏向教育であると批判された歴史を背負いながら、環境教育は、環境問題の真の原因を明らかにする課題を前にして一つの大きな壁に直面しているのである。

最近出版された和田武編「環境問題を学ぶ人のために」のなかで、今村は以上の問題に対して一つの答えを出している。すなわち、今村は環境教育の三つの領域「環境における（in）教育、環境についての（about）教育、環境のための（for）教育」を示した上で、「やはり最後の環境のための教育という点が重要」とし、環境教育では被教育者が「環境問題を理解するだけでは十分ではなく、『行動変容』や『態度変容』が求められる」としている。そして今村は、このような考え方には「価値の刷り込みではないか」という批判があることも踏まえた上で、教育者の環境教育における指導原理を、1）環境教育の価値的志向性を明確にし、そのつど内省する学習者的態度、2）ある価値を押しつけるのではなく、葛藤を踏まえて被教育者と対話する対話的態度、3）あらゆる情報、科学的知識、社会システムの知を検証しようとする批判的態度、の3つにまとめている。今村は、環境教育で重要なのは対話の場を持ち、それぞれが有する価値観の相互理解をはかることだとし、環境教育者は、知識と態度と行動を身につけるだけでなく「教育する勇気」を持たなければならないと力説している。

今村の考え方は、必ずしも日本環境教育学会の主流になっていないが、私は環境教育と強く関わる森林教育の指導原理も、以上のような考え方を参考にしてよいように思っている。山本のいう「林業自体のあり方の変革をうちに含みつつ」行われる教育も、被教育者との誠実な対話、価値観の相互理解のプロセスを経て、その目的が実現されていくように思われるのである。

自分の頭で森林教育の理念を考える

以上、長々と森林教育研究の入口にあたる理念や基本的枠組みについて述べてきた。森林教育は具体的な教育実践として行われるから、森林教育研究も理念的な議論に留まることなく、具体的な教育の課題へと向かわなければならない。しかし、具体的な研究に入る際には、研究者の頭の中では、森林教育とは何か、どこまでを森林教育ととらえるのか、という点が明確になっている必要がある。少なくとも、自分なりの森林教育の定義はしっかり持っておかなければならない。ちなみに、私自身の森林教育の定義は？と聞かれると、「森林教育とは、森林に親しむことで様々なことに気づき、森林を通して自然への理解を促しながら、最終的には現在の森林および森林と関わる人間が置かれている状況を改善していくために、あらゆる分野で行動できる人材を育成することを目標とする教育的営みである」等と答えようと思っている。そんなに明確な定義でもないが、私にとっては常に自分自身の研究の意味を確認する上での羅針盤になっている。

先行研究を見る限り、森林教育研究はまだ緒についたばかりといわざるを得ないが、大切なことは以上のような環境教育や森林教育についての議論を、研究者は常に踏まえながら具体的な研究課題に向かう必要があるということである。昨今では、ただ単に「子どもが好きだから」、「人間に興味があるから」だけの動機で森林教育研究に踏み込む学生諸氏も見受けられるので、このことは特に強調しておきたいと思う。とりわけ学校教育を対象とした森林教育研究の場合は、研究者は学校教育に対して一定の責任を負うことになる。ただ興味本位で教育現場をかき回すことは許されない。環境教育や森林教育の重要性を考えるとき、研究者は是非とも森林教育研究の理念や意義について自分の頭で考え、悩む経験を持ってほしいと思う。

これからの森林教育研究の課題

以下に、これからの森林教育研究の課題について、私の思うところを述べてみたい。

森林教育における林業の語り方

最近、私は森林教育に関して、教育分野としてなぜ森林に限定する必要があるのかと問われたことがある。たしかに自然に親しみながら感性を磨いていく子どもにと

NII-Electronic Library Service

Japanese Forestry Society

っては、森林も隣接する草原や河川などの自然も区別される理由はない。アメリカ合衆国で試みられているエコシステムマネジメントによる流域管理では、森林、農地などの土地利用区分を超越した地域資源管理の考え方がとられている。行政で区分される意味での森林にこだわるべきではないというのは、おそらく正論だろう。しかし、私があえて自然教育ではなく森林教育にこだわるのは、森林が自然と人間との関わりをめぐる問題をトータルに学習できるメリットがあると思うからである。森林と人間との重要な関わりの一つに林業がある。それでは森林教育では、林業はどのように語られるべきであろうか。

抽象的な答えは先に述べたとおり、これまでの林業の歩みと現状を正確にとらえた上で率直に人々に語りかけることである。しかし、いざ具体的な教育プログラムをつくろうとすると、このような基本線だけで満足していていいはずがない。森林教育において林業をどのように語るかは、森林教育研究の避けることのできない重要な課題の一つだと思う。

現在、多くの人々は、厳正な保護が必要な一部の森とそれ以外の森とを区別し、後者については森林保全のために何らかの人手を加えることが大切なことを理解している。こうした森林管理の営みの必要性と、この営みを支えてきた林業に携わる人々との関連、さらに経済行為としての林業のあり方等が、歴史と現状をふまえてわかりやすく整理される必要があるように思う。今後の研究に期待したい。

しかし、以上の事柄は森林教育研究の課題というより、むしろ森林科学研究そのものの課題というべきものである。このように森林教育研究は、森林科学における研究課題を照らし出す役割をも担っているといえよう。

人々の森林・林業観から糸口を探る

森林教育をすすめるにあたって、あらかじめ被教育者が森林や林業についてどのような意識を持っているかを把握することは重要である。これまで、森林科学の分野では日本と諸外国との森林に対する意識の比較研究などが行われているが、今後は森林教育のあり方を探るための情報を意識的に入手するような、森林・林業観の把握作業が必要だと思う。

一例を示そう。表－1は、岩手県内の小学5年生（111名）と岩手大学教育学部小学校教員養成課程の1年次学生（101名）に、「森の木をきること」についてどう思うか、自由記述によるアンケートを行い、その内容を分類・整理したものである。これらの図表からわかるように、小学生では森の木をきることに否定的な意見が約7割を占めているのに対し、大学生では4割弱に減少し、そのかわりに条件付き肯定が6割を占めるようになっている。小学生の否定的意見としては「自然破壊だから」と「木がかわいそう」が目立ち、大学生の条件付き肯定の意見としては「必要最小限の伐採なら可」のほかに「仕方がない」の回答が多いことが特徴である。

以上のアンケート結果をどのように解釈し、森林教育研究の次のステップに生かしていくかは、私自身がこれから検討しなければならない課題であるが、小学生の「木がかわいそう」は命の問題をいかに伝えるか、大学生の「仕方がない」はどう前向きな理解に進めるかといった点を、さらに深く検討していかなければならないと思っている。このように、人々の森林観をただ漠然と把握するのではなく、森林教育研究に役立つ意識調査が、その調査手法とあわせて検討される必要がある。

教育の効果を探る

学校教育では、テストなどを実施して児童・生徒の学力を評価しているが、テストのもう一つ重要な側面は、教育者の教え方の改善点を見いだす資料になることである。しかし、これまで学校における教科教育以外のフィールド活動などは、その活動がどれだけ子どもたちにインパクトを与え、教育目的に照らしてどの程度の効果があったかについては、その困難さゆえにほとんど試みられることがなかった。最近、日本野外教育学会では教育効果の測定を大きな研究テーマの一つに位置づけ、研究事例も蓄積されつつあるが、森林教育の分野でも森林教育プログラムの開発に並行して、教育効果の測定に関する研究が進められる必要がある。

教育効果を探る方法としては、先に紹介した「言葉のアンケート」のような調査を教育活動の事前と事後に実施して回答の変化を検討する方法や、教育活動後に児童・生徒に感想文などを提出させ、その内容を検討する方法等が考えられる。しかし、今のところは教育効果を的確にとらえる決定打はなく、効果測定の手法そのものが研究課題になっている。もちろん、教育効果の測定以前に、そもそも何をもって森林教育の効果と考えるのか、さらには森林教育プログラムの具体的な教育目標は何

NII-Electronic Library Service

Japanese Forestry Society

表-1　小学生と大学生の「森の木をきること」に対する意見の分布

＜小学生（111人）＞		＜大学生（101人）＞	
否定的意見 77人（69％）		否定的意見 36人（36％）	
＜理由＞		＜理由＞	
・自然破壊だから	26％	・自然保護上問題	14％
・木がかわいそう	13％	・環境のバランスが崩れる	12％
・動物がいなくなる	5％	・酸素が欠乏する	10％
・空気がダメになる	4％		
・地球がダメになる	4％		
・その他（単純否定）	17％		
条件付き肯定 22人（20％）		条件付き肯定 60人（59％）	
＜理由＞		＜理由＞	＊重複集計
・伐りすぎはダメ	14％	・必要最小限の伐採なら可	47％
・仕方がない	6％	・仕方がない	30％
		・伐ったら植えればよい	22％
		・計画的な伐採なら可	3％
		・伐採後のアフターケアを	3％
		・大きな木から伐採するなら可	2％
		・後継樹の光条件の改善なら可	2％
		・外材輸入の問題点の指摘	2％
肯　定 2人（2％）		肯　定 2人（2％）	
不明・その他 10人（9％）		不明・その他 3人（3％）	

注1）小学生（岩手県盛岡市内U小学校5年生）と大学生（岩手大学教育学部小学校教員養成課程1年生）を対象に実施した自由記述によるアンケートから分析者の側で意見の内容を読みとり、分類・作成した。
注2）大学生の条件付き肯定の理由のみ、1人から複数の論点提示される場合が多かったため重複集計した。

か、という根本的な課題が研究者の前には横たわっている。正攻法としては、教育目標の明確化→効果尺度の決定→教育効果の測定手法の確立という手順で研究がすすめられることが望ましい。しかし、なかなかそれが難しいとすれば、とりあえず実践される森林教育の内容をできるだけ正確に記録し、これと事前・事後アンケート等の被教育者の意識変化の情報を手がかりにしながら、森林教育のあり方についての断片的な知見を丹念に集め、そこから森林教育の全体像を描くという道をとらざるを得ない。この方法は正攻法に比べると効率が悪いため、たくさんの知見の集積が必要になる。そのためには、研究者の感覚であれこれ難しい手法を考案するよりも、現場の先生方にも実践できるやさしい調査法を開発・普及することで、知見の量的集積の速度を向上させることが重要と思われる。

教育現場では、まじめに環境教育の取り組んでいる現場教師も「ただ生徒を野外で遊ばせているだけじゃないか」と批判されることがあるとも聞いている。教育効果測定法の確立は教育現場から要請されている課題でもあり、今後の研究の深化が望まれる。

海外の事例と比較しながら考える

私のわずかな海外調査の体験から得られた問題意識のなかに、なぜドイツのフライブルクでは人々の環境に対する意識が高いのにもかかわらず、林業に対しても憧れと信頼が寄せられているのかということがあった。この点については、すでに国民性の違い、宗教の違い、森林との関わりに方の歴史の違いなど、様々な答えが出されている。しかし、違いを云々するだけでは、何がわが国の森林教育にとって大切なことなのか、せっかく海外に出かけてもそのヒントを引き出すことはできない。外国の人々の森林・林業観や森林教育の事例についても、何

NII-Electronic Library Service

Japanese Forestry Society

がわが国の森林教育に生かせる教訓となるのかについて再検討されるべき課題が多いと思う。

また、フライブルクの小学校の校長先生から伺った話であるが、同校では教師が子どもに向かって「あくまで個人的な意見」と断りさえすれば、原発建設についての賛否を大いに論じていいとのことであった。先に述べたように、わが国ではこうした政治的な問題について教師が児童・生徒に口を開くことは難しいだろう。しかし、だからといって「こうした問題は国情の違いだ」として、学問サイドからの言及を避けてしまう姿勢は正しくないと思う。海外の森林教育について研究するときは、研究者はそれぞれの国の政治的・社会的条件の違いについても、その是非に対する考え方を含めて人々に向けてリアルに紹介し、わが国の森林教育の実施環境の改善に寄与していくことが重要ではないだろうか。

ドイツ・フライブルクのシャウインスラント山
寒い冬でも多くの市民が山を訪れる

虫害で枯れた森とその解説板
ドイツではこうした現場も意識的に市民にみせている

おわりに

以上、森林教育研究の切り口のほんの一部について私見を述べた。森林教育は幅広い対象を含んでいるから、研究も様々な観点から行われてよいと思う。先にも述べたが、森林教育研究は概念から積み上げて個別課題に迫るというやり方もあれば、これとは逆にいろんな教育事例や調査の結果を集めながら森林教育の概念について考察し、森林教育の全体像に迫るやり方もあり得る。それは、ちょうど考古学者が、バラバラに発掘される土器のかけらをつなぎ合わせて、その土器の全体像に迫るやり方に似ている。

平たくいえば、いろんな角度からどんどん森林教育に関する個別研究に取り組もうということである。しかし、その際に大切なのは、森林教育の先行研究や環境教育論に学びながら、自分なりの森林教育観を確立するための努力を忘れないことである。

引用文献

藤岡貞彦編（1998）＜環境と開発＞の教育学．350pp，同時代社，東京．

佐島群巳（1999）環境教育入門―総合的学習に生かす．183pp，国土社，東京．

関岡東生（1993）環境教育を目的とする森林の利用と整備に関する研究．日林論　104：99–100.

関岡東生（1999）森林教育研究の動向把握を目的とした予備的研究―『林業経済』誌掲載論文の分析を中心に―．林業経済研究　45(1)：139–144.

和田武編（1999）環境問題を学ぶ人のために．286pp，世界思想社，京都．

山本信次ほか（1992）森林の総合的利用に関する一考察―林業経営者からの森林教育の試み―．日林論　103：19–20.

山本信次（1998）市民参加活動のおける「林業教育」と森林管理．林業経済　596：25–32.

全国林業改良普及協会編（1998）森林・林業教育実践ガイド．198pp，全国林業改良普及協会，東京．

NII-Electronic Library Service